Osaka University Knowledge Archive

Title	年頭所感
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1996, 23, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23884
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

年頭所感

田　口　鐵　男*

高齢化社会に入って，さまざまな問題がとり沙汰され始めている。

縄文時代には15才まで生き延びた人はたったの4割位であったそうだ。その生き延びた人も30才ぐらいをピークにして一生を終ったといわれている。テレビなどに見られるように中世の室町時代や江戸時代になると，「人間わずか50年。下天のうちを比ぶれば‥‥」にみらるように「人生わずか50年」。40才を過ぎれば隠居の資格すら得られて翁と呼ばれたものだという。

我々の子供時代は「人生50年」とよく云はれ教えられてきた。ところが，戦後は「人生60年」と言い換えられ，あっというまに「人生80年」の時代を迎えてしまった。今では日本は世界一の長寿国となって100才を超える人もざらになった。

大変めでたいことではあるが，長寿化に合わせて，人間のからだのどの部分品も一斉に耐用年限が長くなったわけではない。人生40を過ぎるとカラダのあちこちにガタがやってくる。

ものは考えようで寿命がのびた分，いろいろと不自由なこともあろうが，先づはめでたいことであるから，せめて気持ちを若くもって，心の張りを保ち老化を防ぐよう心懸けたいものだ。

何時の世も人の生への欲求は無限であって，秦の始皇帝が不老長寿を願ったが結末はむなしかったことがよく話題になるように，それを否定することはできない。健康で豊かな人生ことが高齢社会における明確な時代認識であろう。

昨年は阪神・淡路大震災に始まって，地下鉄サリン事件という人為的異常行動も加わり，大きな社会不安を抱えた年であった。フランス，中国の核実験などもわが国の安全保障に不安をもたらす問題であり，さらに金融界の不正事件・住専問題など異常事態の続出で民生の不安は極限に達している。

経済の再建は遅々として進まなくて，国民の生活行動までも不安定なものとなって，明日への確固たる目標が立てられない現状である。こんなに暗い気持で正月を迎えた年はなかった。

本年，社会不安をなくすることが一番の使命である政治も全く国民の期待にこたえる政策目標を提示していない。マスコミは21世紀云々するが将来像がさっぱり見えてこない。

保健・医療・福祉に関しても沢山の問題が続出し，国民の生活実感と国の施策との間に大きなひずみができてきていることが心配である。

予想もしていなかった急激な高齢化社会を迎えて，まず困ったことは，日本の社会医療保償制度がおかしくなってきたことである。

日本の医療は官僚主導の統制経済であるが，この頃は医療保険制度のほころびが目立つばかりではなく，医療そのものを保険の都合に合わせるようなしまつである。したがって，医療従事者は生業は成り立たないし，医学の進歩にもかかわらず，医療の向上が速やかに患者に還元されにくくなってきている。

統制経済は今どき医療社会ぐらいのもので，公定価格の医療費，薬価の決定はもちろん，医師の免許から処分病院の監査，薬や治療法の認可まで厚生省に権限が集中している有様であ

* 大阪癌研究会常任理事，大阪大学名誉教授

る。その厚生省はいまや，なりふり構わず医療費の抑制に熱中している。私はずーと思ってきたが，保険制度はなかなかよいやり方だと感心していたが，こと医療保険の運用に関してはどだい無理が多すぎるようだ。火災保険のような掛け捨て保険で，もしも保険加入者が全員火事を出したら火災保険は成り立たないことは明らかである。こうも医療の需要が多くて，しかも高額医療になると保険がパンクするのはあたりまえである。国公立病院はそれぞれの一般会計から補てんして何んとか今まで辻褄（つじつま）を合わせてきたが，ほころびがひどくて間もなく破綻することはわかりきっている。

にもかかわらずツギハギ式にほころびを解決しようとし国民をだましだましもってゆこうとしている。欧州諸国は云うまでもなく社会主義の国でさえも社会保険制度は破綻してしまっている。

最近の住専問題を例にとるまでもなく，国鉄問題，食管問題医療保険問題など政府官僚の指導政策はすべて失敗だらけである。国鉄や電々など民間払下げになってどれだけすっきりしたか。

食管でも医療保険でもその制度によってメシを食い余録にあずかっているものが多すぎる。

医療現場の活力を回復するには，統制を撤廃し，すべて自由に，民間レベルでやっていくべきであろう。

日本の国民は徳川時代からこの方ずーと官僚（おかみ）に支配され，何かあればすぐにおかみに何んとかしてくれるといったパターンでたって来ている。これがいけないのである。

国は決して金のなる木を持っているわけではない。すべては国民の税金や料金でまかなわれるのである。もう少し，国民一人一人が国すなわち官僚の思いのままに生かされるのではなく，国民による国民のためのきまりを自由につくって責任をもってやってゆけるようにしたいものである。

いまや国民の政治，官僚不信は極に達している。改革が叫ばれているが，そのためには一度過去のものを捨てなければ，そして根本的に考えなおし，原点にかえって新しい制度をつくらねばならない。

新聞世論ははすぐに国に何んとかせというが，国にやらせておいたのでは録なことはならない。

社会はインホームド・コンセントの時代になりつつあるが，これにはしっかりとした人権思想と自己決定権の確立なくしては単なる権利主張に終り義務の責任遂行はともなはない。

医療をとりまく環境がこんなに悪いのに，まがりなりに医療社会では住専のような話しにならないのは，医師の善意と使命感によるところ大である。

国民１人１人が決して，あまえの構造であってはならない。国に何を求めるかより自分が社会に何ができるのか，いまこそ考えなおす時代でありましょう。

ユートピアは与えられるものではない。自らさがし求め導いてゆくものである。